
IS（インフィニット・ストラトス） “ 銃神が垣間見る未来（さき） ”

銀花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS “銃神が垣間見る未来”^{さき}

【Nコード】

N6737Q

【作者名】

銀花

【あらすじ】

”天才”が舞台を整え、”白騎士”が脚本し、”革新者”が踊るその場所で見守る存在が一つ。それは“正史”では登場し得なかった筈のイレギュラー。そして、その存在が登場したことにより、その物語は“正史”の流れから外れ“外史”へと至る。そんな存在が登場する物語は一体どのように歴史を刻むのか。そしてその存在は垣間見る未来^{mirai}に何を見出すのか

0・舞台裏。始まりの泣き声（前書き）

この作品は原作「IS」^{インフィニット・ストラトス}の二次創作であり、原作の設定や史実の無視。オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。
そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

0・舞台裏。始まりの泣き声

ある国に一人の少女が住んでいた。

その少女は天才であり、たった個人一人の力で世界の情勢を大きく変えた。

ある国に一人の少年が住んでいた。

その少年は天才であり、天才故に大半の事では満足する事は出来ず、無謀にもその少年ある世界の情勢を一人で変えた、少女の要塞と言つて差し支えない居城へ電子が駆け巡る戦争　電脳戦を仕掛けた。

結果は　惜敗。

誰一人、国家一つを用いても破れなかったその牙城を、少年はただ一人だけで半分以上を切り崩すことに成功。最終的には防がれる結果となつてしまつたが、それでも少年はそれだけのことを成し遂げる。

その事に若干の悔しさを感じつつも、少年は今まで得られなかった快感に満足していた。

だが、少女は違つた。

少女自身、自分の事は”天才”だと理解していた。勿論、それ故に自身が”異質”であることにも。

それに、少女は他にも認められる”天才”だ。

世界一の頭脳といつても過言ではない知識を有する少女。それは世界すらもその少女の前では膝を曲げ、屈服した。

そんな少女に、智が力である電脳戦を仕掛け、あまつさえ少女が形成する十あるプロテクトを全て破り、少女自身が相対しなければ

危うくハッキングが可能であつた少年にどうして興味が沸かないことがあるのか。

すぐさま少女は逆探知を掛け、少年の居場所をハッキングする。あれほどの知識や腕を持つのなら、それこそ米のペンタゴンやFBI、それからCIA、独のBKA、仏のジャンダルムリなどのような特殊機関に属していると予想していたが、少女の予想は大いに裏切られる結果となる。

数あるプロテクトをやや強引に突破し、少年本体を叩き、得られた情報。

それは自身の祖国、それも少女が現在住んでいる場所の近くからアクセスされていたというものだった。

少女は爛々と瞳を輝かせながら、滅多に出ない自分の部屋を飛び出し、その少年が住まう場所へと向かう。

少女の家族が何事かと様子を見に来るが今はそれに構っている余裕など少女には存在しなかった。

数少ない”天才”である故に”異質”である少女が興味を持つことが出来た、肉親でも親友でも幼馴染でも妹でもない、完全なる他人の少年の元へと。

インフィニット・ストラトス

IS。

それはただ一人の天才が製作した、各国の軍事戦力、そして世界情勢を大きく変えた兵器の名称。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツであり、総機体数は現在世界が”認識している範囲”では467機。

ISは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISAーマーから形成されており、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い”究極の機動兵器”。特に防御機能は突出して優れており、シー

ルドエネルギーによるバリアーや”絶対防御”などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは”殆ど”ない。

また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

その中でも際立つのがISは自己進化の設定。戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる”形態移行”を行い、より進化した状態になる。また、コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになる。

だがISには謎が多く、その全容は明らかにされていない。特に心臓部であるコアの情報は自己進化の設定以外は一切開示されおらず、完全なブラックボックスとなっている。また、原因は不明であるがISは女性にしか動かせないとされている。

「通信？ それも通常回線じゃなくて秘匿回線の方ねエ……」

俺は一瞬だけ思考し、すぐにその通信に手を付ける。

この秘匿回線を知っている存在は極めて少数。その内の殆どが俺自身知り合いと認識しているのが多数だ。云わば、秘匿回線というよりプライベート回線と言った方が正しいかもしれない。

欠伸一つ打ちながら俺はその回線を開いた。

今では珍しい音声のみの回線。別に通信画面式の奴を使用しても良いのだが、こちらの方が趣きを感じられる。

『こちら”無所属”^{ノーバディ}。応答を願う』

『はあ……、お前は変わらないな』

『その声……』 白騎士”か？』

約一年ぶり、とまでは行かない。声を聞いたのは数カ月ぶりという位。その声を聞いた時には実際に顔も見ている。

それでもそれなりに久しく感じられるのは、俺が過ごす日常がそれだけ波乱に満ちたものだからだろう。

『その名前で私を呼ぶなどあればと言ってるだろう？』

『と、言われてもねエ。通信傍受を警戒してるんで本名を出すのはマズいだろう？ 俺もお前も世間様にや知られるのは体裁が悪いんだから』

『私は特に問題ないがな……』

『俺はあるんだよ、”白騎士”。それにこうなったのも全てお前が俺に押し付けたんだだろうが』

『………すまない』

『別に気にしてないからいいけどよ。んで？ 俺に何か用事か？ 珍しくこの回線を使って連絡を入れてくるところを見るに』

少し言い過ぎたか。通信越しでもあいつが少し気落ちしているのが手に取るように感じられた。

だが、俺が行ったことは何一つ間違っていない。俺がこんな生活をしているのも全てあいつが俺にその役目を押し付けたから。だが、その役目を了承したのも俺自身。

どちらも悪く、そしてどちらも悪くない。

『……タイムアップだ。とうとう世界はもう一度革新を迎える』

『ほう……？ ということは』

『ああ。今日現在を以てお前はIS学園に入学して貰い、そして』

『”革新者”の護衛ってワケだな？ そして全ての汚れ役、”革新

者”を守る為の生贄となれってことだ』

俺はその回線を繋ぎ上から立ちあがった。

時は満ちた。十年前のあの日から始まった、天才と優しい姉と、そして絶望した少年が描いた終着点。

手に掲げられる金色の縁を持つ、漆黒の十字架。

「起きろ アストラナガン」

その十字架の正体は本来男性には扱えない筈の兵器

インフィニット・ストラトス
IS。

『……大丈夫か？』

『当たり前だ。俺を誰だと思っていやがる』

マルチフォーム・スーツが刹那の間に俺を覆う。その光景を傍から見ればまるで変身物のヒーローのよう。

漆黒の身体に金色の装飾が所々に入り、一番目に入るのが金色のこんじき翼。天使のような悪魔のような、幻想的な美しさがそこにはあった。宇宙空間での活動を目的としているため、ISは空を飛翔する事が出来る。

つまり

『さて、空の旅へと赴きますかッ！ 受け入れ態勢はすべて任せても大丈夫だよな？』

『滞りなく終了している。お前は”革新者”が女子高の中に男子一人が混ざるのは些か可哀想という理由で無理矢理編入させられたという名目だ』

『ISはどうする？』

『……隠れていたが、”革新者”が世間に注目されたから表に出てきたという処で大丈夫だろう』

『一寸無茶ぶりじゃねエか？』

『大丈夫だろう。出来るだけIS学園の情報は外に洩れないようにしているからな。その為にあそこには”更識”がいるんだ。お前も現当主とは顔見知りだったろう？』

『認めたくはないが、一応は顔見知りだ』

『含むところがあるようだが今は無視しておく。なら大丈夫だろう。』

”無所属”^{ノーバディ}の情報はこの国でも機密、というより、正確な情報を持つている国家はないだろうからな』

『OK。なら早速そっちに行くかッ！』

漆黒の機体は金色の羽を羽ばたかせ空へと浮かぶ。

高度は凡そ三千メートル。常人なら呼吸はおろか、余りの高さに足が竦むだろうが、俺には関係ない。空気の方はISが保護してくれ酸素の問題はなく、高度の方も幾千幾万とIS訓練により乗りこなし、とうの昔にそのような恐怖は消え去った。

身体を地上と水平になるように傾け、そのまま翼に装着された推進ブースターを吹かせ、一気に初速から最大側まで引き上げる。

「世界は動く。それが是か否かを取るかは未だ解らず。だが、それでも確かに世界は動く」

そして俺は紺碧^{あお}を司る空の海を超え、”天才”が舞台を整え、”白騎士”が脚本し、”革新者”が踊るその場所へと飛び立った。

0・舞台裏。始まりの泣き声（後書き）

初めましての方は初めまして、知っている方はこんにちわ。駄文作者の銀花です。

遂にやってしまった……orz

ちよつと息抜き気分で執筆していたら、いつのまにか投稿していた。まあこちらはサブ扱いとし、メインはもう一作品となるので、更新速度が遅くてもとやかく言わないでくれると幸いです。

さて、ここからは小説内の解説。

主人公機体の名前が“アストラナガン”となっていますが、これは稚拙な説明によりただの“アストラナガン”ではないことがわかります。

そう、これこそがスパロボで最強クラスの能力値を持ちながらも、ドット絵のせいでゴキブリゴキブリと嘲笑されていた機体“デイス・アストラナガン”なんです！

ナ ナンダッテー！！

当初は同じスパロボ作品の主人公機体“ヴァイサーガ”でもしかかと思いましたが、如何せん一夏の“白式”と似通い過ぎているので断念。ならばISがこうまで有名になる前々から考えていたストフリでも使おうかと思いましたが、まあ皆一緒のことを考えてるよねということ断念。

どうしようか迷いに迷い、“アストラナガン”を使うことまでは決めたのですが、イマイチピンと来ない。ならば、と思い“アストラナガン”を一段階変化。これにより至ったのが“デイス・アストラナガン”なんです。

だってあれですよ。ドット絵はゴキブリっぽいけど、等身大にしたらカッコイイですし、近接武装が鎌ですよ？ 滅茶苦茶浪漫溢れる武器じゃないですか。これ以外選択肢はないでしょ？

そんなこんなで始まった今作品。

進行速度は亀ですが、未長く見守り読まれることを願っています。

1・IS学園（前書き）

この作品は原作「IS」の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

1・IS学園

IS学園。

それはアラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校の名称。

基本的にISの操縦者育成を目的とされており、その運営及び資金調達は原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産とされ”原則”公開する義務があり、また黙秘、隠匿を行う権利は”日本国”にはない。

また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は攻勢に加入し、協定参加国全体が理解出来る解決をすることを義務付ける。

また入学に際しては協定参加国の国籍を持つ者には無条件に門を開き、また日本国での生活を保護すること。

俺は手に持つ辞書相当の分厚い本を閉じ、やや自身の意識を含んだ解釈を頭の中で転がしていた。

「つまりは『日本人のせいで世界情勢が狂ったじゃねーか。どうにかしろよ黄色い猿共。あ？ 学校作って人材育成と管理やれ。あとその技術ブリーズ。金は出さんからな』ってことだろ？ よくこれだけの啖呵を吐けたもんだよな。下手すればその軍事力を以て滅ぼされる可能性もあったって言うのによ」

それは当時の外交官がへっぴり腰だったのが問題だったんだろうな。

後、ISの情報が殆ど機密状態のせいで、ISが世界に爆発的に広まった”白騎士事件”の実績を以てしても強気には出られなかったんだろう。下手に強気に出て相手を不快にさせ、それでいてアテにしようとしていたISは動きませんでしたって展開になったら

目も当てられねえし。

そんな一介の学生が考えるモノでもない思考を展開させながら、俺は呑気に腕時計を見やる。

現時刻は8：30分。そして俺の現在の立場は学生。普通の学生ならば遅刻に相当する時間だ。勿論、俺の学園の登校時間は他書の学校よりも遅い。なんてことはなく、歴^{れっき}として遅刻だ。

ふう、と息を零しながら俺は外の景色を見る。

都市から幾ほどこ離れた場所に建設された、要塞に似た建物。周りを高い塀で囲い、常時侵入者が居ないか警備員が見回り、赤外線カメラによる防止、監視カメラは常時三人態勢で二十四時間勤務。そんな建物が俺の目的地であり、そして世界各国からある一つ兵器を操る為だけに送りだされた子供達の育成機関。

俺はその門を潜り抜け、目的地である教室へと急ぐ。

本来ならば、その学園は美女の園。男子が一切立ち入り禁止である筈の聖域に俺は臆することなく踏み込んだ。

「全員揃って……ませんねえ。遅刻でしょうか？ 事故とかにあってないといいんですけど」

「ふん、どうせアイツのことだ。寝坊かそこらへんだろっ」

「あれ。織斑先生、遅刻している生徒の事知ってるんですか？」

「まあな。あれは幼い頃からの馴染みだ」

「ふえー、そうなんですか」

「というより山田君も知っていたような」

ザワザワとした話し声が教室の扉越しに届く。

流石の俺もこの空気の中を突貫する勇氣は湧いてこない。周りの

目線何か基本的に無視する俺だが、こういうのに関しては別物だ。

さて、どうしたものか。もっと騒がしかったりすれば何の問題もなく混ざっていけるのだが

「お前は初日からなにを遅刻しとるんだ」

「うげっ！ まさか俺とこの担当教師は千さんかよ……。ツイてねエな、俺」

トホホとした気分で俺は三カ月ぶりの邂逅を果たした。

眼の前の出来る女という風貌をした女性は幼い頃からの馴染みの人物。そして世界的にも有名な人物。名前は織斑千冬、通称千さんだ。

手にした出席簿で俺の頭を叩く。すぐに手を出すところは全く変わっていないようだ。

「さっさと教室に入れ、この馬鹿。どれだけの生徒達がお前を待っていたと思っているんだ」

「……俺なんか無視してさっさと授業に入ってくれてよかったものを。変なところで律儀なのも変わんねエのな」

「ふん、これが普通だ、普通。お前が少し大雑把すぎるんだよ」

「そうかア？ これでも一般男子生徒と自覚してるんだがな」

「お前のどこか一般なんだ　つと、いつまでもこうしてるワケにもいかな。ほれ、さっさと入って自分の席に付け。　一夏を

頼むぞ」

「はいはい」と。

了解」

俺は耳元で呟かれた言葉に律儀に反し、その扉を潜り抜ける。

すると目に入る女、女、女。女子高だからこれで当たり前の光景に辟易としながら、当初の目的である人物が眼に入った。

織斑一夏。唯一”女性だけが操る事の出来る”ISを動かした”男性”。

世界各国から今一番注目を受けているであろう存在。それが俺の目的の人物であり、俺が護衛する対象。

さあ、コイツがどれだけ面白い存在なのか。

約束通り、俺は全力で守る。だが、面白くない存在であれば守るという意思も御座なりになってしまふのは人間だから仕方がないことだ。

反面、もしもコイツが俺に”本気”で守らせると言うナニカがあるのなら、その時は俺も全身全霊で守ってやろう。

それが俺の生き

「つて、えええええええええつ！？ ももも、もしかしてあーちゃん！？」

「誰だよ、折角俺が自分の生き様を回想してるって言うのに　つて、まー姉か？」

そこには懐かしい顔があった。先ほどの千さん以上の昔の馴染み。俺が幼い頃に出逢った少女は、今では一介の女性……とは言い難いが、それでも確かに成長した姿がそこにはあった。

「タクツ。いつまでそうやって突っ立ってるつもりだ、御堂。山田君も公私は区別してくれ」

「す、すみませんっ！」

「あいよ、つと」

流石に千さんも怒り始める頃だから真面目モードにチェンジ。

にしてもここにまー姉がいるとは思わなんだ。最近じゃ丸つきり会わなくなってたからな。最後に会ったのは……確かまー姉が日本

代表候補生になる前だったはず。日本代表候補生に選ばれてからは訓練何かで俺が住んでいた場所には来れなくなっただし。まあ俺もその頃から日本に留まってることが少なくなったのも原因か。

そんなことを考えながら俺は自分の席へと移動する。

周りからの視線を感じつつも何でもないかのように振舞い、自身の席へと着くことに成功。その横には

「よ、良かった。俺以外の男がいて、本当に良かったっ！ あ、

俺は織斑一夏な、よろしく。お前は？」

「俺は御堂秋人。気軽に秋人でも呼んでくれ、一夏」

「おう。よろしくな、秋人！」

「こっちこそ！」

どうしてかいきなりの友情の芽生え。

自己判断では自分の事を社交的だと思ってはいるが、まさかここまで初対面の人間に気軽に話しかけられるとは。

流石は千さんの弟ということかな？ 千さんと同じで心に一本の芯を持つてる雰囲気だし。嫌う要素は未だない。

「そこっ！ 静かにしろ！」

「ゴ、ゴメン千冬姉」

俺はあっちゃくと仰々しく掌をデコに乗せ天を仰いだ。

「織斑先生と呼べ」

そう言いながらお得意の出席簿アタックが炸裂。

後は簡単に予想できるように周りの生徒が一夏と千さんの関係を声高に聞きまくり、結局一夏と千さんの姉弟説が判明。

騒然とするクラスの生徒達に千さんの一喝の声。そして静まる生

徒達。

予想しやすい光景、ありがとうございました。でももう少し捻らないと飽きが来るもんなんだがねエ。

ショートホームルーム

「さあ、SHLは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

……どこの鬼教官だ？ というより、千さんはここをどこかの軍隊施設と勘違いしてねエか？

確かに特殊な軍事施設かもしれないが、そのノリが通用するのは軍隊だけだ。ここにいる人間はISを扱うことのできるただの一般人に過ぎない。それなのにこんなスパルタのような教育内容とは、いやはや流石は千さん。俺達に出来ない事を平然とやってのけるッ。そこにシビれる！ あこがれるウ！

「それから、そこでそわそわとしている山田君も私事は放課後に行つてくれ」

「は、はいっ！」

そう言えばまー姉と全く会話出来なかったな。

あの様子を見れば思いつきり気になつてゐることは丸わかりだけど。まあ適当に煙に巻く^{けむ}としよう。

流石に“真実”を話すのは駄目だろ。あの人は昔から表情^{かお}に出るドジっ娘だったし、こんな“黒い真実”を知るには優し過ぎる。

まあそこがまー姉の良い所かもしれないねエけどな。

1・IS学園（後書き）

二話目にして早速のアンケート実施（笑）

内容は至って単純。誰をヒロインにするかというものです。
ということで下記の中から一人を選んでくれると幸いです。

？シャルことシャルロット・デュノア

？まー姉こと山田 真耶

？生徒会長こと更識 楯無

？天才こと篠ノ之 束

……ふむ。各地で見られるヒロインの内、まあよく見かけられるのが二人で、もう二人は作者自身の趣味丸出しってのが良く解る構図ですね（笑）

あとのヒロインは一夏のハーレムパーティーってことで。シャルもどうしようか悩んだんですが、一応こっちに入れたかった。会長は別に持ってきてても問題ないよね？ まー姉と束さんに関しては既にフラグが立ってる匂いもありますが、そこは眼を瞑ってスルーということ。

特に締め切りなどは設けてないので、気軽に書いてください。ついでに感想も書いてくれると感謝感激です。

どうせヒロイン決めるって言っても、最終的くっ付くだけであってハーレム（偽）を形成するのでしょうかね。

2・授業風景（前書き）

この作品は原作「IS」^{インフィニット・ストラトス}の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

2・授業風景

物凄い空気が悪い。

いや、具体的に言えば空気が悪いというより、ピリピリとした緊張感がこの教室を覆っているのだ。

現在、このクラスには28名の女子と本来ここには居得ない筈の男子が2名。内、ニュースにより世界的に有名になってしまった男子が一人。言わずもがな、一夏の事だ。

俺に向けられる好奇の目線もあるにはあるが、やはり一夏に比べればマシというモノ。

一夏本人はそんな視線に慣れ親しんでいないのか、そわそわしたりキョロキョロしたりと若干の拳動不審。

世界情勢が変化して早十年。

現代の戦闘兵器、つまりは大型戦艦や戦車などはタダの鉄屑へと成り果て、世界の軍事バランスは崩壊し、それと同時に世界情勢も崩壊したのだ。

その切欠を作り出したのがただ一人の天才。その天才が属していた国が、ここ日本国。

後は誰にでも想像出来る通り、諸外国等がそれに危機感を覚え、そして生みだした協定　通称“アラスカ条約”を採択されたのだ。

結局、この世界情勢の変化により、ISという個人戦略級兵器を動かせる女性が偉いという公式は簡単に成り立ち、そうして女尊男卑の社会構成が完成するというワケだ。

「虚像しか与えられていなければ、その虚像を与えられている人間からしてみれば実像に変わらないってワケか」

ふとそんな眩きを零してしまつたが、騒がしい教室内では誰一人としてその言葉は拾えない。それは隣に座る一夏にさえ、だ。

ただ、一夏は先ほどから気になる物を見つけたのか、視線を横に泳がせている。

そして漸く決断したのか、チャイムが鳴る五分ほど前、一夏は席を立つ。視線の先にいる人物は篠ノ之束の妹である、篠ノ之箒。確か一夏とは幼馴染という間柄だったはず。

これは懐かしの再開というものだろうか。

いいねエ、そういう青春は大好物だよ？

道行く通路はモーゼの十戒の如く両断され、ここにいる全員の視線を真つ向から浴びていた。

それにしても、さっきまでの視線は駄目なのに、こういう時の視線は大丈夫ってどこか可笑しくねエか？

そうこうしている内に教室から二人は姿を消す。

つまり、教室に残る特異点は俺ただ一人だけ。若干居心地悪く感じるも、それは彼女達が悪いワケではないので、何も気にしていな
いかのように振舞つておく。

あまりそういうのを表情に出してしまうと無暗に彼女達を傷つける結果となるからな。そういうところ、ちゃんと俺は考えてるのよ？
だから話しかけたいけど話しかけられない。話しかけて欲しいけどどんなことを話せばいいから駄目っ！
みたいな視線を寄越されてもドツシリと座っておくのさ。

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

勝手知ったるISの運用方法の注意やその他諸々。

年単位でISを動かしている俺にとって、既にこのような講義は意味を為さない。というより、俺の場合、先ほどまー姉が述べた殆どの項目を“既に破っている”のだから。

そんなことをツラツラと考えながら、ふと隣から呻き声のようなモノが聞こえてくる。

少しだけ驚きつつもその発生源を確認。間違いなく、その呻き声は一課から発せられていた。

「……どうかしたのか？ 額に皺を寄せてウンウン唸るなんざ」

「……全く理解出来ねえ」

「……はア？ これって入学前に参考書の内容だろ？ あれって確か必読じゃなかったのか？」

「……古い電話帳と間違えて捨てた」

「ワロス」

ボソボソ声で話す声は、まー姉以外の声が聞こえない教室内では意外と聞こえるモノだ。

それを目敏く発見するまー姉は、まア声を掛けるわな。一度気になったら梃子でも動かない性格だし。

「織村くん、何かわからないところがありますか？」

大きな双丘を揺らしながら胸を張るまー姉。

外見だけを見てとれば頼りになりそうなお姉さんなのだが、中身を知っている俺にとっては不安で一杯だ。

そんな姿に眼を輝かせる一夏を見て、俺は内心ほくそ笑んだ。これは面白いことになりそうだ。

「……おい、一夏」

「……どうかしたのか？」

「……わからないんならさっさと言った方が良くねエか？ 嫌でもお前は目立つ存在だ。最初から出来ないことは出来ないって言うていた方が後々になって困るよりマシだと俺は愚考するぜ。言うたろ？ 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って」

「……そうだな」

俺の言葉で決心がついたのか、一度顔を俯かせ、次に顔を上げた時には決意に秘めた瞳をしていた。

計画通り。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません！」

「ブフツ！ ちょ、真面目にウケル！」

最早完全にネタとしか言えないモノを一夏は堂々と宣言した。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

引き攣る笑顔。流石に優しさとお節介の塊であるまー姉でもフォロイを入れることは難しかったか。

周りのクラスメイトも哑然とした表情で一課を見つめ、姉である千さんも呆れた眼で見つめていた。

そんなクラスの雰囲気に一課は戸惑いを覚えつつも、目線だけで俺に助けを求めてくる。

「（タステケ……）」

「（ムリダ）」

俺は無情にもそんな宣告を下す。

「……織斑、入学前の参考書を呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

無駄に清々しい様が好感的だ。俺限定だが。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

パシンと気持ちいい音が教室内に鳴り響く。

それにしてもあれほどの分厚さを持つ参考書を普通電話帳と間違えるか？ 電話帳つてもっとコンパクトだと俺は思うんだが。

しかもあの参考書って表紙にデカデカと必読の文字が記載されて気が……

一夏、お前はどこまでドジっ子なんだ？ まー姉と同クラスだぞ？

「あとで再発行してやるから一週間以内で覚えろ。御堂はその補助だ。もし一週間以内で覚えきれなければ、二人共々罰則を与える」

「はアっ！？ 俺全く関係ねエじゃんっ！ 横暴だ！」

「五月蠅い、黙っている」

「酷エ……」

俺は何も悪くないのに……

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと……。あと秋人は関係ない気が」

「だからこそ、だ。お前のせいで他の人間に迷惑がかかるかもしれないからお前も俄然とやる気が出るだろう？ 万が一達成出来なく

ても恨まれるのはお前自身だからな。頑張らずともこちらはどちらでもいい」

「やれば結構、やらずともこちらは害はなく、そちらに害しかない。というワケだな？」

「そう言うことだ。いいな？」

「……はい。やります」

一夏のしょんぼりとした表情に周りの女生徒は小さい声ながらも黄色い悲鳴を上げている。

これはあれか。母性本能が擦くすくられるというものなのだろうか。男の俺にはよく解らん。

別にモテたいと思ってるワケじゃないから別にどうだっていいんだが。

「そうしよげるなって！ 一週間もあれば俺がバツチリ教えてやつから」

「マジか！？ 流石は秋人、心の友よっ！」

「任せとけ、マイブラザー！」

ガシツと腕を交わす俺達は、まるで今日知り合ったばかりだとは到底思えない程の息の合い方だ。

「はあ……。山田君、アイツらは放っておいて授業を続けてくれ」

「ええと……。いいんですか？」

「ああ、どうせ」

俺と一課が意気投合して居た瞬間、頭上から激しい衝突音と、そのの音に釣り合うだけの衝撃が訪れた。

ここで俺から豆知識を一つ。頭を叩かれると脳細胞が死滅し馬鹿になるとよく言われるが、あれは嘘だ。

頭を叩くだけで脳細胞が死ぬのなら、ボクサーやK1選手など全員即死レベルになってしまう。故に、頭をいくら叩かれようと馬鹿になる事はない。まあそれも限度があるけどな。

「　こうすれば大人しくなる」

「あはは……」

だが、それは馬鹿にならないだけで痛みは当然発せられる。

恨みがましい視線を千さんに送ってみるが、まるで堪えた様子はない。流石は冷血女とまで呼ばれる存在だ。

そんなだからいつまで経っても彼氏が出来ないんだよ……

「御堂？　言いたいことがあるならこの場でハッキリと言え、ハッキリと」

「……何でもないでエす」

んなこと口に出したら間違いなく即行で死刑だろうよ。

流石の俺もそこまで馬鹿じゃない。こういうのは自身の胸の内だけにとどめておくのが一番。それが誰も害する事ない唯一の方法だからな。

2・授業風景（後書き）

ゆっくり投稿でようやく三話目。

まだまだ序盤も序盤なので戦闘シーンも皆無という現状。

かといって執筆速度を変えることも出来ないし、それよりもちよいちよいと忙しくなってきたしね。

誰だよ、オールでカラオケ行こうなんて言いだした馬鹿は。御蔭で喉が痛い（泣

財布もすっからかんになるし、踏んだり蹴ったりだよ、本当。面白かったのは否定しないけどもさw

3・邂逅（前書き）

この作品は原作「IS」^{インフィニット・ストラトス}の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

3・邂逅

「ちょっと、よろしくて？」

あの悲劇の授業の後の休憩時間。俺と一夏は男同士の会話を楽しもうとして矢先に声を掛けられる。

一課は素っ頓狂な声を上げ、俺はその声を掛けてきた発生源の主に眼をやる。

その姿はまさに中世貴族を体現しており、透き通ったサファイアの瞳が二人を射抜かんと注視している。

金色の髪と自身を纏う”今時”の女性の雰囲気。男性をただの労働力としか見ていない、俺が毛嫌いする人間性を持った女性だった。その思想も今の世界情勢では仕方ないと言えるのだが、それでも俺は嫌いなのだ。

”虚”を”実”と信じ込んでいる”人間^{ばか}”は。

「訊いてます？ お返事は？」

「おい秋人。お前呼ばれてるぞ？」

「はあ？ 俺じゃなくて一夏の方だろ？ てか、俺はこんな貴族様みたいな知り合いはいねエし」

知り合いではないが情報としては知っている。

確かイギリスの代表”候補生”セシリア・オルコットだったか。ふむ、情報通りの人間だな。

ま、この歳でそこまでISを動かせたら天狗にもなるわな。普通に考えたらエリート街道まっしぐらだし。ただ、天狗故の傲慢だからこそ成長は著しく悪くなる。

それは何故か？ 向上心というモノが無くなっていくからだ。下

手に候補生とまで選ばれてしまったばかりに自分は最強なんだと誤解してしまい、そして勝手に自滅する。

よくあるパターン。ありふれた出来事。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というモノがあるんじゃないかしら？」

「ほら。言われるぞ、一夏」

「いやいや。どう考えてもあれは秋人の方だろ。だって顔がお前の方に向いてるじゃん」

「ばっか。あれは恥ずかしくてお前の方に向きたくても向けないっていう乙女心の表れだろ？ もう少し女心を理解しろよ、一夏は」
「わたくしは貴方達二人に話しかけているのですけど？」

ピキピキと額に青筋を立てながらも、捲し立てては自身が持つ矜持に反するのか、オルコットは無理矢理に自制していた。

しかし二人か。なんもん知るかとか声高に叫びたい。せめて名前くらいは呼べ。でなけりゃ話しかけられてるのか全く理解出来ねエよ。そんな中、一夏は全く別の事を考えていたのか無関心そうに言葉を放つ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

まあ急遽こんな場所に入学させられた一夏にとってしてみれば、眼の前のオルコットはただ美人さんとしか認識できないだろう。

一夏にとって、未だにESとは馴染み深いものではない。本来ならば触れることすらあり得なかった兵器だ。それを取り巻く環境すら興味を持てる筈もない。どうして自身と全く関係ないものに興味を抱けようか。俺ならば絶対に無理だ。

だから一夏の言葉は正論のはず。だが、それすらも相手は気に入

らなかったようだ。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリス代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

愕然とした表情すらも一夏はスルーし、自身が疑問に思ったことを口にする。

……コイツは度胸があるのかなのか一体どっちなのか。てか、さっきの言葉を何事もなくスルーってどういう神経してんだ？

「代表候補生って、何？」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「貴方っ、本気で仰ってますの！？」

「おう。知らん」

もう腹筋が崩壊しそうなんだが。

表情には出さないように必死で抑え込んでるけど、もうそろそろで限界に近い。なので、バレないように俺が補足を入れておく。

「代表候補生ってのは字面通り、国家代表IS操縦者の候補生ってなワケだ。所謂エリートって感じ」

「成程、そう言われればそうだな」

「てか一夏。お前ってテレビとか見ねエの？ 興味がなくてもそれなりの知識は入って来るだろ」

「ああ、俺ってテレビみない人間だから」

「ふうん……」

完全にオルコットを除け者として二人だけで会話する。

だが、しばらく動きを停止させていたオルコットは復活し、声高に宣言した。

「そう！ エリートなのですわ！」

……コイツはコイツで大丈夫なのだろうか？

ちよつと痛い子にしか見えないし、それよりも教室内の視線とかが気にしないのか？ 思いつきり睨みつけるとまではいかないが見られてるぞ。

絶対にコイツは知らずして敵を作るタイプだ。というより、現在進行形を以て作ってるだろ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくする事だけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか。それはラッキーだ」」

「……馬鹿にしていますの？」

いや、お前がそう言ったんじゃない。

俺と一夏は『なあ？』と言った風に見合わせる。別に俺達は間違ったことを言った覚えはない筈だ。

「大体、貴方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入学出来ましたね？」

「そりゃそうだろ。今まで全くISと関係ない生活を送っていたんだぞ？ それでどうやって知れと？ お前もしかして吃驚するほど馬鹿なのか？」

「なっ！？」

「男でISに詳しい存在なんてISに何らか関わってる奴らしかいねえよ。あとはテレビで取得出来る情報くらい持つてる程度。態々

自分達が使えない兵器をパソコンで調べるような酔狂な奴の方が少ない」

「おいおい……。そこまでにしとけて。別に俺は気にしてないんだから」

「……一夏がそう言うんだったらここまでしとくか」

俺は若干不完全燃焼だが、当の本人がそう言ってるのだから止めるのが手前。

まあ自分でも少し言い過ぎた気がしなくてもない。ただ、久しぶりに友と言えそうな奴が悪愚痴を吐かれたんだ。これくらいは大目に見て欲しい。

だが、未だにブツブツと呟いてる奴が一人。

「わたくしが馬鹿？ このセシリア・オルコットが馬鹿？ そんな話あるわけじゃないですわ。わたくしはエリートなのですよ？ そう、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリート」

その言葉の内容を一夏は律儀に拾い上げる。

それが新たな火種となる事も知らないで。若干一夏は天然が入ってると思うんだが、どうだろ？

「入試って、あれか？ ISを動かして戦うってやつ」

「まア、オルコットの言葉をそのままとればそれ以外にありえないだろうな。確か一対一のガチンコ勝負だったか？俺は受けてねエから知らねエけどよ」

「ん？ あれだったら俺も倒したぞ、教官」

ピシッ、とまたもや教室内の空気は凍りついた。

唖然とするクラスメイト。目を大きく見開いたオルコット。どうかしたのかと言わんばかりに首を傾げる一夏。爆笑寸前で机に突っ

ぶして耐え忍ぶ、俺。
カオス
改めて思うが混沌だ。

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

漸く復帰を果たしたオルコットは間違いであってくれと願わんばかりの表情で一課に問いかける。

しかし、一夏はその問いに無情な宣告を下した。

「女子だけではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「もしかしたら倒した生徒全員にそんなことを伝えてるのかもな？」

「何で態々そんなことをするんだ？ 普通に言えればいいものを」

「そうした方が伸びる可能性もあるし。いるだろ？ 褒めれば伸びる子ってのは。まア反対に驕って潰れる輩も出るだろうが、潰れる奴は所詮その程度だったってことで切り捨てられるだけだし」

どっちが正解なのかは俺にも判断は付かない。

大体、相手をした教官に持つ良さにバラつきがある筈だ。ここIS学園の教師が相手をしたのならまー姉みたいな候補生クラスの教師も存在すれば無名の選手。果てには千さんが相手をしたって可能性も無きにしも非ず。それで全てを全て同じ物差しで測るのは些か問題がある。

だが、オルコットも候補生の名を持つだけあって他の生徒よりISの操縦が優れていることも確かだろう。

「貴方！ 貴方も教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。多分」

「多分って……。何か問題でもあったのか？」

「まあちよつと」

そうした所で休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

遠巻きに見物していた生徒たちは皆自身の席へと戻り始め、他クラスから噂の男子生徒を身に来ていた生徒達も戻っていく。

「っ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！？」

そんな捨て台詞を吐き、オルコットも周りと同じように早足で席へと戻る。

オルコットが席に付いたと同時に担当教師である千さんと副担のまー姉が教室の中に入って来た。

「『逃げないことね！？』って一体何から逃げんだ？」

「さあ………？」

小さな疑問を感じつつも、俺達は千さんに出席簿で叩かれないように口を閉ざした。

3・邂逅（後書き）

一週間ぶりの投稿。

やっぱり二作同時連載は無茶でしかなかったか……

一話書くのに結構時間喰うからあんまり余裕が出来ることが少ない。ただでさえ積んでるゲームや小説を消化するのに時間が足りてないって言うのにorz

4・セシリア・オルコット（前書き）

この作品は原作「インフイニット・ストラトスIS」の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

4・セシリア・オルコット

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性に付いて説明する」

この時間は先ほどまでの授業とは違い、まー姉の代わりに教壇には千さんが立っていた。

余程重要な内容なのか、まー姉も手にノートを抱え、真剣に千さんが振るう教鞭を聞き及んでいる。

しかし、ふと思いついたかのように千さんは一度授業を中断し、伝えるべき連絡を俺達に伝える。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦の出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦の代表者？ そんな疑問を胸に抱えているのが丸わりの一夏。

さつきも言った通り、字面を見れば大体のことは理解出来るだろうが。そこんところには頭が回らないのか？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

おっと、思った以上に面倒な役職だな。

ざわめく教室は無視するが、果てさて一夏の方はどうだろうか。予想通り、自分には全く関係ないだろうと言った風貌で楽ししてい

た。こういう奴ほど面倒事に巻き込まれるんだがどうなることやら。周りを見ればやはり視線が集まる俺と一夏。多分だが、どちらかを推薦しようという魂胆なのだろう。

しかし甘いっ！

「俺は一夏を推薦するぜっ！」

「はいっ。私も織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

フィッシュッ！ 俺の作戦通り、俺に向けられていた視線は俺の言葉により掻き消え、注目は全て一夏へと移った。

悪く思ふなよ？ 俺もまだこんな場所で注目を集めるワケにはいかねエからな。だが、困った事があつたら助けてやつから御相子にしてくれ。

……全部建前で、本音は面倒だから押し付けたとも取れるけどな！

しかし一夏の奴、全く動じてないな。まさかそうなることすら予測済みで、最早明鏡止水の極意に至っているとか？

まさか、な。自分の事だと思ってないとかじゃねエだろうな？

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ？」

そして一夏は千さんの口から名前を呼ばれ、漸く自分が推薦された事に気が付いたようだ。

「お、俺！？」

俺はそんなおっちょこちょいな一夏に大丈夫の意味を込めてgoodのサインを送ってみる。

……全く気休めにはならなかったようだ。

「織斑。席に付け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「な、なら俺は秋人を推薦するっ！」

「ちよつ！ 一夏！ お前何やってくれてんだよっ！」

「死なば諸共じゃつ、秋人！ てーか、お前が最初に俺を推薦したんじゃないかつ！ 詫び入れてキチンと働けっ！」

「あゝ、御堂には既に委員会の仕事が割り当てられるから却下だ」

え？

「……織斑先生。俺、そんなことこれっぽっちも聞いてないんですけど？」

「今初めて伝えたからな。ちなみにこれも拒否権は存在しない」

「……………」

「……頑張れ、秋人」

「……あア。頑張るぜ、俺」

一気に俺の中のテンションは激減する。

周りからの生温かい視線を受け、涙が零れそうだ。無駄に優しい一夏の心遣いが直接響く。

そんな青春物語を演じているなか、空気が読めないオルコットがこの空気を壊す。

「待ってください！ 納得いきませんわ！」

パシンと千さんの出席簿アタックには到底届かないが、それでも中々を音を立て席を立つ。

生徒たちの視線を一向に浴び、それでいて無謀にも千さんに反論する。ただ、千さんの方は歯牙にもかけないような表情かおをしていたが。

まー姉はそんな空気にオロオロしながら、どうすれば収拾するの
かを模索していたが時間切れ。オルコットの反論が始まった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか！？」

「この日本国は基本的に多数決の原理の採用してるからな。クラス
の大半が一夏を推薦してんだからお前は関係なくね？」

そんな無茶ぶりの反論に俺が反論を入れるが誰ひとりとして耳は貸さず、オルコットの論弁だけが教室内に響いた。

……寂しくなんてないやいっ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、
物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サ
ーカスをする気は毛頭ございませんわ」

ブチっと俺の毛細血管が切れるような音が聞こえた。

同じように横の一夏は顔を引き攣らせ、千さんは無表情でオルコ
ットを“睨みつけていた”。そりやそうだ。今挙げた三人は生粋の
日本人。それをこうまで侮辱されれば怒って当然。

しかも千さんの場合はそれは一入ひいつだろうに。何たって唯一無二の
大切な家族。それをこうまで侮辱されればキレルだろう。反対に千

さんがこうまで侮辱されれば間違いなく一夏はキレる。出逢ってまだ数時間しか経っていないが、それくらいの人間性は十二分に理解出来る。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

そしてそろそろ一夏の我慢は限界のようだ。

俺として自国にそれほど愛着心は持っていないが、それでも大切な人が住む国をこうまで侮辱されれば勘に障る。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で」

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

火山は噴火した。

そしてよく言つた、一夏。

「なっ……！？」

顔を真つ赤にしたオルコットは物凄い形相を以て一夏を睨みつける。

当の本人はしまったと言わんばかりの顔をでそちらをそろゝっと窺っていた。

そして尚も続くオルコットの剣幕。

「あつ、あつ、貴方ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

だが、そろそろ俺も口を挟まして貰おうか。

「おいおい侮辱だつて？ 先に俺達の国を侮辱して来たのはそっちじゃねエのか、ブリタニアン？」

「何か文句でもあるかしら！？」

「当たり前だ、時代遅れの偏屈者。まず第一に、このクラス内のどこに猿なんている？ あア、顔を真つ赤にさせたお猿さんに近い女生徒はいるか」

「なっ」

最早絶句。

二の句が継げないという言葉はこついう時に使うのだろう。

「第二に、どうしてクラス一の実力者がお前なんだ？」

「そ、それは私がイギリス代表候補生であるから」

「そう。お前は未だイギリス“代表候補生”でしかない。それなのにどうして自身が最強という根拠はどこから来る？ 入試で唯一教官を倒した？ それこそ一夏だつて倒したと言っている。その時点で測れる実力はイーブン。それなのにどうしてお前は自分が一番だと言えるんだ？ 代表候補生に選ばれたからと言って驕ったか？」

「お、おい秋人」

流石に可哀想になったのか一夏がオルコットに助け舟を出すか、俺は止めないし止まらない。

本当にストップがかかるのなら既に千さんが俺の口をふさいでいるだろう。だが、その行動には未だ出られていない。つまりまだ言っていないという証拠だ。

まあ千さんも少しキテいるのだろう。

「第三に、文化が後進的？ それこそ笑わせてくれる」

「な、何が」

「その文化が後進的な国が造り上げた史上最強の兵器のお零れを貰っている国はこのどいつだ？ 大体文化が後進的って、日本ほどに独自の文化が長く続いている国なんかねエのにな」

そう。日本という国は長い歴史の中、一度もその歴史を、文化を途絶えさせたことのない唯一の国だ。

それは技術面からみれば遅れていた時期はあった。しかし、現代で言えば反対にこの日本という国は技術の最先端を突っ走っている。それを最も的確に示すものがIS。インフィニット・ストラトス

それを後進的だとは本当に笑わせてくれる。もう一度ちゃんと歴史の勉強をし直してこい。

俺の反論に返す言葉がないのか、オルコットは俯いたまま黙りこくっている。

勿論、それを行った俺を避難するような視線はない。最初に口に出したのはあちらであり、それに対する反論を俺は行っただけだ。静まり返った教室は、ただ空虚な空気だけを残していた。

5・啖呵の切り合い（前書き）

この作品は原作「インフィニット・ストラトスIS」の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。
そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

5・啖呵の切り合い

「決闘ですわ！」

憤慨するとはかりに怒りを顕わにするオルコットは最終的にその結論へと至る。

しかし決闘か。まさか容姿だけでなく、その中の精神構造も中世貴族のモノなのか。今時の人間が決闘なんて言う言葉を使う所を滅多に目撃したことを俺はない。精々が一対一^{サシ}だとかその程度。

だが、ここで一つ問題がある。その決闘は一体誰に向けられて放たれた言葉なのか。

彼女が睨む眼光の先には俺と一夏の二人。元々喧嘩を売ってきたのはアチラであり、それを買ったのが一夏。そしてそれに逆襲したのが俺。

この中で一番怒りの矛先を向けられるのは一体誰か。まア間違はなく俺だよな。

「おう。いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い

いえ、奴隷にしますわよ」

あれ？ 俺って思いつきハブられてるくね？

俺を除いた一夏とオルコットが互いにメンチを切り合っている。

最早お互いに相手しか目に入っておらず、途中まで当事者であった筈の俺は途中退場の宣告らしい。

……何で？ 別に喧嘩を買う気もこれっぽっちもなかったけど、

これはこれで寂しいんだけど。

そう思って周りを見渡してみると、返って来るのは不憫な子に対

する視線ばかり。

一応周りと俺の感性は同じのようだが、納得がいかない。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？ 何にせよちようどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいかなーと」

その瞬間、クラスは爆笑の渦に包まれる。勿論、その笑いの中には俺も含まれている。

その笑いに含まれる成分の大半が失笑や嘲笑の類。いくらISを動かせる唯一の男性だといっても、大半の人間からすればその程度止まりであり、代表候補生には勝てないと踏んでいるのだろう。

だが、俺の笑いにはそのようなモノは一切含まれていない。

純粋な哄笑。^{うらやま}腹を抱え、気を抜けば教室の床に笑い転げてしまいくらいなほどの大爆笑を俺はした。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

クラスメイトは口々に一夏を宥めようとする。

それもそうだ。現在の女子からの視点から顧みれば、男子などただの生殖器官程度の認識しかないのだろう。力？ そんなもの、ISを動かせない時点で決定している。

事実、もし今から男女差別が起こりえようものなら数時間で男陣

営の拠点は潰されてしまつ。それほどISは馬鹿げた戦闘力を有しているのだから。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

先ほどまでの激昂はどこへやら。今ではその顔にある笑みは嘲笑のみ。

「えー、織斑くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けてもらつたら？」

「男が一度言いだした事を覆せるか。ハンデはなくていい」

良く言った。

それでこそ、俺が守るに値する人間だ。信念が、心が弱い奴なんて俺は興味ねエ。

俺が興味がある奴は、ただ心に芯がある奴だけだ。

「えー？ それは代表候補生を舐め過ぎだよ。それとも、知らないの？」

「まア待てよ」

一夏に話しかけている女生徒の話に無理矢理加わる。

今の一夏は戦況がアウェイ過ぎて自信を無くしている。ならば俺がアイツのホームになろう。

「舐めてんのはデメエらだよ。さっきの時間、一夏が言った言葉を忘れたのか？」

「秋人？」

「さっきの……時間？」

コイツらはこの十数年間で植えつけられた固定概念に縛られている。

それは仕方のないことだ。一人の天才によってそうなるように誘導されたのだから。

だが、その時代ももう終いだ。その概念は既に不要で、壊さなくてはならない不純物にすぎない。

「一夏は入試を突破したって言ったんだぞ？　それはつまり教官を倒したってことだ。もっと言い変えてみれば、このクラスにいる生徒の中で教官を倒していない奴らは男性である一夏よりも弱いってことだ」

俺の言葉を聞いてその女生徒は眼を見開く。

「さて、改めて聞こうか。この教室にいる生徒が何人入試を突破したかどうかを。まさか一夏にあれだけ嘲笑を向けておいて、オルコット以外は誰一人突破してないなんてないよなア？」

悪魔の笑みを浮かべながら、俺はクラス内にそう問いかけた。

返って来るのは沈黙のみ。やはり突破したのは一夏とオルコットだけか。

「おいおい……。まさか自分のことを　「御堂、そこまでだ」……はいよ」

流石にこれ以上はアウトっていうワケか。

まア俺自身まだ時期尚早だと思っていたし、止めるタイミングを

作ってくれて有難かった。

「少し言い過ぎた、スマンかった。だが、あまり俺の前で一夏を侮辱しないでくれよ？ 折角俺達はここに勉強しに来てんだ。そんなツマラン侮辱で俺は良いとしても、一夏はそういう空気に慣れてねエんだ。楽しい学園生活をそんな暗い雰囲気で過ごすのもあれだろ？」

「……」

自分達の行いを思いだし、悔いているのか。誰一人として声を発せず、ただ沈黙の実が教室内を支配する。

俺が言い過ぎたのも、まア認める。だが、アチラさんが向けていた笑みも簡単に許せるものでもない。

「……ゴメンね、織斑くん。ちょっと言い過ぎちゃった」

「私も謝る。そうだよ、織斑くんは入試を突破してるんだっけ。そう考えたら私達何も言えないや」

「い、いや。俺は全然気にしてねえから！ 他の人達もそうだし！」

口々にクラスメイト達は一夏に謝り、それをオロオロしながら返答する一夏。

ちよつと言い過ぎた気もしたが、これであまり一夏が舐められることもなくなっただろう。その代償として俺の評判が落ちようと気にしない。

「御堂くんもゴメンね？ そういえばそうだよ。御堂くんは織斑くんが学校に来たからここに来たんだし。楽しみにしてた友達が侮辱されれば怒るよね。ああ、何でも頭が回らないかな、私……」

あ、あれ？

「ゴメン。私も自分本位で相手の気持ちなんて何にも考えてなかった……」

どうしてこうなった？

もっとうとう、一夏が持ち上げられて俺が嫌われるみたいな未来を想像してたのに、全く違うんだけど？

別に好かれるのが嫌だというわけでもないが、こうまで自身の想像に裏切られると調子が狂う。

「……別に俺も言い過ぎたと思ってるから御相子だ。それでいいだろ？ 両方が謝ったんだ。後は禍根なんか残さず楽しもオぜ？ 折角の学園で一緒のクラスなんだ。暗い感情より明るい感情の方がいいだろ」

俺は顔を背けながら口早に話す。

その光景を千さんとまー姉が微笑ましい表情で見ているのを窺える。

……こういうのは俺のキャラじゃねエ。普段をしない事をしたもんだから無駄に恥ずかしい。

あれだ、あれ。いつも裏に潜って腹の探り合いなんかをしてるもんだから、こんな純粹無垢な感情を向けられたらどう対応すればいいか全くわからん。

「……わたくしも一応ですけど謝っておきますわ。正々堂々を模範とする筈が、いつのまにか侮辱してしまつて……。本当にごめんなさい」

「いや、俺達も言い過ぎたさ。な、秋人？」

「あア。こちらで一応謝っておく。が、さっきの言葉が俺の本心だ

ということも忘れるなよ？」

「ええ、肝に銘じておきますわ」

……ほオ？ この短時間で瞳の色を変えるか。

思った以上に素質はあるのかもな。驕っていた雰囲気が消え、これが本来のセシリア・オルコットの在り方なのかもしれない。

「もう一度、貴方達の御名前を教えて貰ってもよろしいかしら？」

「織斑一夏、よろしく」

「御堂秋人だ」

先ほどのまでの険悪の雰囲気は消え去り、今では仲の良い級友のような雰囲気になる。

だが、一番言い表すのに適しているのは“ライバル”かもしれない。オルコット いや、セシリアの瞳に宿る光は仄かな意思が宿っていた。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナ行方。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

先ほどまでの授業とは打って変わり、一夏は真剣に授業に取り組む意思が見られる。

それはクラス全体にも言えることで、先ほどのやり取りが功を奏したようだ。IS学園に入学できたということでふぬけていた精神に一括を入れる起爆剤のような役割を果たす。

「さて、一夏はこの最初の試練を乗り越えることが出来るかな？」

覚えることは大量にあるだろうが、そこは俺がそれとなくフォロー

―してやろう。

それが此処に於ける俺の役割なのだから。

6・昔馴染み（前書き）

この作品は原作「IS」^{インフィニット・ストラトス}の二次創作であり、原作の設定や史実の無視、オリジナル主人公の登場や原作キャラの恋愛など、原作好きの方には非常に嫌悪感を抱かれる描写が多々あると思います。そういうのが嫌な方は早々にブラウザバックすることを推奨します。

6・昔馴染み

終業の合図であるチャイムが大きく鳴り響く。それは放課後の開始の合図でもあった。

根本的に俺がこの学園で学ぶことなどある筈もないが、一応は真面目に受けているという態度が必要だ。下手に余裕な態度であれば周りから怪しまれる。それ以上に千さんから怒られるだろうし、まー姉にも小言を言われるのは確実。

そんな中、横に座っている一夏は机に突っ伏し、言葉にならない呻き声を発していた。

それを助けようとした瞬間に携帯のバイブレーション。滅多に使われることのないそれが自己主張を始めた。

「……ふうん。ま、気になるだろうわな」

「どうか、したのか？」

乞食者のようにヨロヨロとこちらを見上げる一夏。

「いや、少し用事が出来た。夜になったら勉強みてやるからそれまでは一人で頑張ってくれ！」

「はあ？ 何言って」

「アデュー？」

俺は一夏が何か言う前にその場から姿を消す。姿を消すといっても、一夏が何かを言う前に逃げただけだ。

そのまま携帯に連絡を入れてきた主の元へと向かう。向かう場所はこの学園に存在する当直室の在る一室。

出来るだけ目立たないように、話しかけられても先生に呼ばれて

る等の言い訳を駆使し、その場所へと向かった。

そこに辿り着けば、社会のマナーであろうノックを数回。

「あ、開いてますよー」

声の主は、俺の一番最初の幼馴染。歳は離れているが、親の繋がり
りで知り合ったドジっ娘で、それでいて優しい姉貴分。

「久しぶりだな、まー姉」

「それはこちらのセリフです。本当に吃驚しましたよ？ まさかあ
ーくんがESを扱えるようになっていたなんて知りませんでしたし」
「そりゃ言っ
てなかったし、言っ
てたら言っ
てたらで面倒事になっ
たろ？」

「それはそうですけど……」

最後に逢った頃から面影は変わらない。ちょっとだけ身長が伸び
たまー姉。

その癖して女性の象徴である部分は大分と発達したようで。何て
言うかアンバランスだな、おい。

そんな俺の視線を気付かないのか、未だにまー姉は恨めしそうな
表情でこちらを見る。
かお

「何時からなんですか？」

「んー、まー姉が候補生になった後くらいか？ てか、今はプライ
ベートの時間だろ？ 敬語崩して普通に話しても大丈夫だって。敬
語で話されると背筋がムズムズしてしゃねエ」

「ふふっ、変わらないね、あーくんは」

「そうそう人間ってのは変わんねエもんだよ」

「そう？ 私は結構自分が変わったと思ってるけど……」

「それは単なる自意識過剰なだけ。久しぶりに見たが、俺からしてみれば昔からのドジっ娘と何ら変わってねえよ」

「あー、酷いなあ」

ゆつたりとした雰囲気とその空間に醸し出される。

「にしてもまー姉がIS学園の教師たア……、人は見掛けによらないモノだな？ あんなにおっちょこちよいだったまー姉が人にモノを教えるようになるなんて」

「それでも努力はしたからねえ。それにしても驚きだったなあ。まさかあーくんがIS学園に入学してたのもそうだけど、織斑くんと同様にISを動かせるなんて」

「それも右往左往した結果だったけどな。千さん あー、千冬さんが色々世話焼いてくれなかったら今頃一夏みたいな状態だったかも」

「そういえば織斑先生とは知り合いなの？ 織斑先生は昔馴染みって言うてたけど……」

当直室に設置されている簡易台所でお茶を沸かし、盆に乗せて運んでくれる。勿論、その上には茶菓子もセット。

落ち着く緑茶の香りが部屋に漂い、甘い羊羹の匂いに非常にマッチする。

羊羹は有名老舗の奴か？ 緑茶も高級玉露だし……。流石は最先端の国営学園の教師。給料も半端ねえな。

「千さんとはもう長い付き合いだな。てか、千さんの家って俺達が住んでた家の近所って知ってたか？」

「ほ、本当に……？」

「ああ。元々、千さんと知り合いになったんじゃないかってもう一人のツレの親友が千さんだったから知り合いになったんだがな。俺はそ

のツレの友達で顔合わせしたってワケ」

「へえ……」

これは嘘ではない。その昔、俺は束さんに俺の家を強襲され、それからなんやかんやあり千さんとも知り合いになったのだ。

しかしあの時は自分でも笑うくらいに驚いたもんだ。急に眼の前に世界を動かした天才が現れたんだからな。しかもその第一声が「友達になろうZE！」だったし。流石の俺も呆然としたさ。

「ま、それ関係でISに触れて、まさかの機動成功。まア面倒事に巻き込まれること確定だったからその事實は隠蔽されたんだが」

「織斑くんもあーくんと同様に機動に成功してしまった」

「後は想像通り、千さんに頼まれて表舞台に出てきたってワケだな」

説明はこんなもんで大丈夫だろ。

“嘘”は言ってない。だが真実を全て話したわけでもない。真実を少し隠し、それでいて真実を“暈し”て“脚色”しただけ。

本当に嘘つきは本当にことに少しだけ嘘を混ぜる者を言うらしいが、それだとバレた時が面倒だし言い訳が効かないし？　なら真実をちよいと変えてやればいい。これなら言い訳もやりやすいし、純粹で素直なまー姉は騙されてくれる。

「結構苦労したんだね……」

しみじみと語り、何故か俺の頭を撫で出す。

擦ったかったので俺は無理矢理振りほどく。この歳でそんなことをやられると恥ずかしいっていう思春期の男子の心情を理解……してねエだろうなア。

溜息を吐きながら、俺は最後にまー姉に問いかけた。

「聞いたかったことこれだけ？　これだけだったらすっさと一夏んとこ戻って手助けしてやんねエといけないんだが。千さんに無茶ぶりの課題を出されたしな」

「うーん、本当はもう少し話したかったけど今日のところはいいよ。また今度時間が取れたら、ね？」

「はいはいっと。一応まー姉は俺の最初の幼馴染だからな。ぞんざいに扱ったりはしねエよ」

「もう……。私がお姉ちゃんなんだからね？」

腰を当ててプンプンと怒る姿を見て、誰がまー姉を年上と判断出来るだろうか。

「わかってるって」

立ちあがりついでにまー姉の頭をくしゃくしゃと撫でてやる。それで機嫌が直るのは昔から一緒に今も変わらないだろう。

「わわわっ！？」

「んじやな。明日の授業も頑張つてやれよ？」

俺はそう言い残し、まー姉の当直室から姿を消した。

俺はまー姉と別れた後、すぐに自身に割り当てられた寮部屋へと向かう。

殆どの部屋が相部屋の中、俺や一夏だけが特別で個室……なんてことがあるワケなく、誰もが予想できる通り一夏との相部屋だ。時刻はそろそろ夕焼けが落ちる頃。夕食にはまだ早く、かといって遊びに行くには遅すぎるそんな時間帯。

どこかしこも女子、女子、女子の空間は正直息がつまりそう。何処に行こうと好奇の視線が絶えない。若干鬱陶しいとすら感じてしまふほどだ。

声を掛けられようが少しだけ対応し、即座に離脱。こんなところで捕まってしまうば寝るまで話されない。下手すれば寝ずに徹夜コース直行かも。

曲がり角を曲がり終え、それで尚一番奥の部屋。そこが俺と一夏に割り当てられた部屋だ。

「おゝす。頑張ってるか　って、お邪魔中だったか？」

自分の部屋に入った瞬間、目に入った光景は一組の男女。

別に男女の営みをしてただとか、情事の真っ最中だったとか、合体中だったとかではない。ただ一組の男女が向かい合って座っていただけ。

卓上には飲み物と筆記用具。それから辞書相当の本が数冊積まれ、男子の方が生徒で、女子の方がそんな男子の教師役。つまりは勉強会の真っ最中だったってワケだ。

「お、お前は……」

そう言って女子　篠ノ之箒はこちらを見て眼を剥く。

「あれ、秋人。お前夜まで帰って来なかったんじゃないのか？」

顔を上げそう言う男子は俺の友達である一夏。

「なに、お前の勉強の方が心配で早めに切り上げてきたワケだが、成程……。篠ノ之よ、やっぱり俺はちょっと出掛けてきた方がいい

か？」

「な、何を言っているっ！？」

「いやだって。折角の昔馴染が苦勞してる所を助けてやってるワケだろ？　ならその役目を奪い取っちゃ俺は悪者じゃねエか」

「何言ってるんだ？」

一夏は俺の言葉を本当に理解しておらず、当の本人である篠ノ之は顔を真っ赤にさせ口をパクパクさせていた。

初々しい反応は好感が持てる。しかし馬鹿の天然具合にや辟易とされるね。

「ま、出て行く出て行かないにしてもまずは自己紹介と行こうか。俺は御堂秋人だ。気軽に呼んでくれ」

「……篠ノ之箒だ」

「女の子に向かってすぐに名前で呼ぶにや抵抗があるだろうから篠ノ之と呼ばして貰うか」

「……好きにしろ」

ぶすつとした表情で、どこか怒っている雰囲気を漂わせている。

やっぱり俺はお邪魔無視っぱいねエ。そんな邂逅が篠ノ之との出逢いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737q/>

IS（インフィニット・ストラトス）“銃神が垣間見る未来（さき）”

2011年4月1日19時02分発行